

エイズ・結核 感染連鎖

弱る免疫、上がる発症率

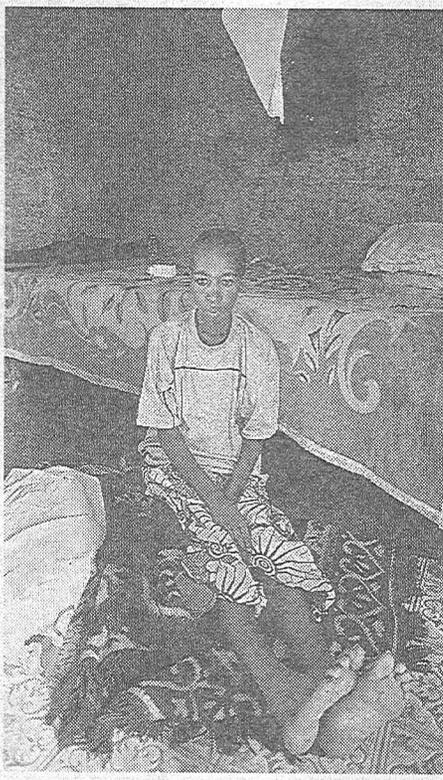
エイズウイルス(HIV)と結核菌の二重感染が、南部アフリカで猛威をふるっている。先進国の援助で治療薬は行き渡りつつあるものの、医療スタッフの人材不足は深刻だ。交通の不便さもあり治療を受けられない患者はまだ多い。治療もままならないのに臨床試験を迫られるなど、援助国の注文にも振り回されている。



ザンビアの首都ルサカのジョージ地区に住むエリザベス・ムレンガさん(30)の体調がおかしくなったのは昨年末。市内のレストランで調理員をしていたが、せきが1カ月ほど止まらない。今年1月に診療所で調べたら、結核とわかった。HIVにも感染していた。結核の薬を毎日飲み続けなければならぬ。だが、薬を配る医療センターまで自力で歩けない。定期的に訪ねてくれる住民ボランティアが頼りだ。「結核は薬を飲み始めるとせきは止まる。でも、医師がOKを出すまで絶対に薬をやめてはいけません」。結核菌を完全にやっつけるには薬の長期間服用が欠かせないことを伝えていた。

ザンビアでは結核が深刻な問題だ。10万人あたりの結核患者は05年に600人余、20年前の6倍に増えた。その一因にHIVの拡大が考えられる。ザンビアではHIVの感染率が、成人では16%に上る。新規の結核患者の7割がHIV感染者と推定されている。HIVに感染すると、免疫力が下がって感染症にかかりやすくなる。エイズの発症だ。つまり、結核はかかりやすい感染症の代表格。ジョージ地区のような人口密集地では、より感染しやすく、衛生や栄養の状態が悪いことも発症率を押し上げる原因になっている。

世界保健機関(WHO)によると、世界のHIV感染者は320万人のうち、約7割の2250万人がサハラ砂漠以南のアフリカに集中している。HIVと結核の二重感染が深刻なのは南部アフリカの国々。複数のパートナーを持つ慣習などが原因らしい。ザンビアや南アフリカ、ジンバブエなどは、新規の結核患者のHIV感染率が50%を超えている(図)。



HIVと結核菌の二重感染者、エリザベス・ムレンガさん。窓がない8畳ほどの部屋で暮らしていたザンビア・ルサカのジョージ地区で、飯塚晋一撮影

高給求め 医師は国外へ

「とにかく医療スタッフがいけない」
06年から国際協力機構(JICA)によるエイズ治療の強化プロジェクトで派遣されている早川忠男医師はそう訴えた。保健省の06年の公表資料では人口約1200万

20人程度しか増えない。治療薬はあるが医療従事者の不足で病気の診断や薬の処方ができない。ザンビアでは13万人がエイズ治療を受けるが、感染者はその10倍近い。「これだけ患者がいるとこの先どうなるのか」

「と早川さんは嘆く。人材不足を補う動きは緒に就いたばかりだ。ルサカのジョージ地区では、NGO・AMDAが住民ボランティアによる結核治療サポーターを養成。患者の家庭を訪問して薬の服用を確認し始めた。

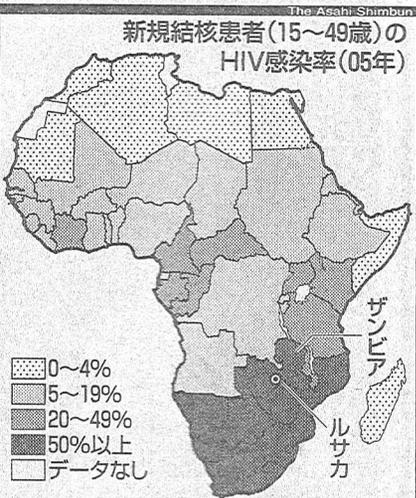
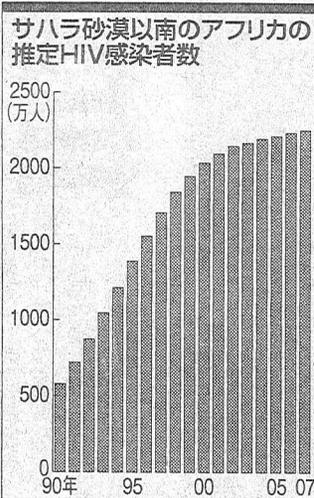
員1万人とその家族を対象に、国から支給されるHIV治療薬を工場内の診療所で処方する。従業員のボランティアがコンドームを配布するなど予防にも努めている。

丹羽裕之・南アフリカトヨタ副社長は「拠点を置くからには、予防などのHIV対策にも腰を落ち着けて取り組む必要がある」と話す。

頼みの綱の資金援助 介入が重荷に

広がる結核を封じ込めるには、結核に感染して発症しやすくしているエイズの対策が肝心だ。エイズは複数の薬を服用する多剤併用療法の登場で、発症を防ぐことができるようになってきた。ただ、一生、薬を飲み続けなければならない。治療が浸透すればするほど医療費負担が増え続ける。ザンビアで治療を支えているのは海外からの援助だ。06年度のエイズ対策費2億3594万のうち、ほとんどを世界銀行や米英、NGOなどから資金提供を受けている。米国からは1億8千万(08年度)が拠出される予定だ。だが、ザンビアの国家エイズ評議会にJICAから派遣されている瀬古孝子・政策アドバイザーは「援助国の介入に振り回されている」と話す。ボツワナでは支援国の研究者により、HIVに感染した妊婦を対象に臨床試験が行われているという。例えば、妊娠何カ月で治療を始めれば母子感染の予防に効果があるのかを検証するには、本物の薬を与える人と偽薬を与える人に分けて比較することになる。すると、本来は治療が必要な患者に薬が与えられない不利益が生じかねない。だが、こうした臨床試験を受け入れない、支援を受けられない恐れがある。瀬古さんは「支援を受ける国が、援助の内容に主体的にかかわれるよう行政能力を強化することが大切だ」と話す。

ルサカから車で2時間のニヤボンベ村でも、住民が患者支援グループをつくった。HIV感染者を自宅を巡回していた。カウセリングや、お湯でぬらした布で体をマッサージュし、洗い流す。南アフリカ・インド洋岸の港町ダーバンにあるトヨタの工場でも、従業員



サハラ砂漠以南のアフリカの推定HIV感染者数

料では人口約1200万人

「と早川さんは嘆く。人材不足を補う動きは緒に就いたばかりだ。ルサカのジョージ地区では、NGO・AMDAが住民ボランティアによる結核治療サポーターを養成。患者の家庭を訪問して薬の服用を確認し始めた。

員1万人とその家族を対象に、国から支給されるHIV治療薬を工場内の診療所で処方する。従業員のボランティアがコンドームを配布するなど予防にも努めている。

丹羽裕之・南アフリカトヨタ副社長は「拠点を置くからには、予防などのHIV対策にも腰を落ち着けて取り組む必要がある」と話す。

あしたを考える